

G. ヴェンカーは 方言地図に何を期待したか？

佐々木 英 樹

What did G. Wenker Originally Expect of his Dialect Maps?

Hideki SASAKI

In 1876 Georg Wenker began his research of German dialects by an indirect method, that is, by mail. The research intermittently continued, came to cover the whole Germany, and resulted in “Sprachatlas des Deutschen Reichs” (SDR) in 1923, although it has never been published formally. A limited portion of the SDR (only 8%), however, was finally edited and published under the name of *Deutscher Sprachatlas* (DSA) (1926-1956). According to a formal way of counting, his dialect survey came to completion as long as 80 years after its inception.

Through many publications like handbooks for DSA, we notice that there are two different opinions about G. Wenker's original intention of his long-time project. One is that it was done to verify the academic proposition in comparative linguistics that there is no exception to sound rules. The other is that he planned the work simply to get clear dialect boundaries by collecting detailed material. The present paper aims to examine which of the above views is correct and then to claim that the latter ‘klare Dialektgrenzen’ view is true.

There is a strong probability that G. Wenker's successors, co-workers and the like created an only apparently trustworthy story out of their good-will but mere conjecture.

本稿では、「言語」と「方言」は同じ意味で使います。つまり、相互互換性をもつものと考えます。ただし、とくに地理的側面を意識するときは、「方言」を使う傾向があります。

1. ヴェンカー G. Wenker の方言地図作成過程の概略と本稿の目的

ドイツで最初にドイツ全土を対象にした方言地図を作成したのはゲルマン語学者ヴェンカー Georg WENKER でした。1852年2月25日、デュッセルドルフで、製本工でもあり、美術商でもあった父ヨハン Johann Gottfried Wenker と母ヴィルヘルミネ Wilhelmine Wenker (旧姓ペトリ Petri/デュッセルドルフから北東へ約50km離れたドルトムント出

身) の間に生まれました。1870年プロシアを中心とするドイツ諸邦とフランスとの間に起こった普仏戦争に G. ヴェンカーは、義勇兵として参加しています。この戦争に勝って、翌1871年ドイツ (第二) 帝国が生まれます。その際ドイツはフランスからアルザス・ロレーヌ地方を手にいれます。こうした経緯で、現在フランスの領土に復帰しているこの地方も、ヴェンカーのドイツ方言調査では対象地域になりました。このような例からもわかるように、『ドイツ言語地図』(DSA) の「ドイツ」が指す範囲は、現在のドイツの領土と一致しないことは当然です。

しかし、ヴェンカーは最初からドイツ全土を対象にした方言地図を頭に描いたわけではありませんでした。簡単にかれの軌跡をたどってみます。

最初の方言地図(もっぱら音声変異に的を絞った)

の対象地域はスイスにその源をもちドイツ西部を走るライン河をかかえるライン州の北部でした。『モーゼル河以北のライン州言語地図』 *Sprach-Karte der Rheinprovinz nördlich der Mosel* がそれです。この(通信)調査を開始したのが、1876年のことでした。それ以来、北部ドイツ・中部ドイツ・南部ドイツ(正確な範囲は、前稿「『ドイツ言語地図』(DSA)の調査文」、『駒沢女子大学・研究紀要』第2号の中の地図を参照)からなる第二ドイツ帝国の方言地図をとにもかくにも完成させたのは(それも、手書きの地図。出版されたものではありません)1923年でした。『ドイツ帝国言語地図』 *Sprachatlas des Deutschen Reichs* がそれです。地図化の過程でヴェンカーが死去した(1911)後は、F.ヴレーデ Wrede が引き継ぎ完成させました。地図枚数1646、項目数339。手書きで二部ずつ作成。一部はマールブルク大学『ドイツ言語地図』研究所に、もう一部は、ベルリン国立図書館に保存されています。この地図をもとに、規模を縮小して公刊したのが、『ドイツ言語地図』(DSA) [1926-1956]です。

こうみてきますと、1876年から1923年までの47年間、あるいは1956年までとすれば、じつに80年間というながきにわたった大仕事でした。最初はヴェンカーの個人の調査として始まりましたが、1888年からは国の事業として進められることになりました。1888年6月16日付けの文書で、当時のマールブルク大学管理官 Kurator の Dr.マイア Meier から同大学の図書館司書の Dr.ヴェンカーへ伝えたことによって、正式に国営移管が達成しました[Hildebrandt (1988:147)]。国としての体制の変化もありました。現在のドイツの歴史でもっとも波瀾にとんだ時期と重なりあっていることが成立過程をさらに複雑にしています。また、この事業の中心人物もヴェンカー以後3回交代しました。ヴェンカー(1852-1911)からヴレーデ Ferdinand Wrede (1863-1934)へ[交代した年代は不明確ですが、1911年に近い年]。ヴレーデからミツカ Walther Mitzka (1888-1976)へ[1933年に交代]。そしてミツカからシュミット Ludwig Erich Schmitt (1908-1994)へ[1956年に交代]。最初の調査1876年から数えて100年以上もたった今日では、収集した調査資料も保存の問題が生じます。回収された調査票の保存については、1987年から同88にかけて、旧西ドイツの内務省とヘッセン

州との経済援助で、ドイツ本土のものについては、マイクロフィッシュ化されました。マールブルク大学の『ドイツ言語地図』研究所の書庫 Archiv に保管されている『ドイツ帝国言語地図』についてもすでにカラーフィルムで縮小撮影されてあるので色褪(あせ)の心配も少なくなっています。

このような歴史を抱えた、ヴェンカーの方言地図は、もともとどういう目的で作られ始めたか? ヴェンカーが方言地図を作ろうと思った意図はどこにあったか? それを探るのが本稿の目的です。つまり、ヴェンカーが方言地図に何を期待したのか、について主な二つの説を紹介し、その真偽のほどを検討しようというのが本稿の目的です。一つは、「音法則に例外なし、の検証」説、もう一つは、「明確な方言区画、の発見」説です。それぞれの代表的なものをみながら話をすすめます。この二つの説を紹介した後、ヴェンカー自身がこのことについてどう述べているか、をみます。そこでは、ヴェンカー自身の意図も方言調査が進んでいく過程で変化していくことに触れます。どう変わって行くか、それを知ることが、**「方言地図作成目的の二説」**いずれが正しいかを決定的にする意味でも重要です。

長い期間をかけ、結局一般向けに、正式に公刊されたのは『ドイツ言語地図』の正味110枚の方言地図にすぎませんでした。しかし、その過程がいかに複雑なものであったかをかいま見るのには、『ドイツ言語地図』の表紙に書かれた標題をみるのがいいと思います。それを資料1として掲げます。さらに、収められている地図に簡単な解説を加え、資料2として、最後に掲げておきました。十分意味があると思ったからです。

2. ヴェンカーの目的説 I : 「音法則に例外なし、の検証」説

ヴェンカーの生きた時代は、言語学で言えば、比較言語学時代でした。彼が、結果的に『ドイツ言語地図』のための最初の調査を開始した年1876年に——「結果的に」と言ったのは、最初からヴェンカーは『ドイツ言語地図』を作ろうと思ったのではないから——「音法則に例外なし」という命題を宣明した[風間1978:186]論文を A.レスキーン August Leskien が発表しました。そういうこともあって、

「音法則に例外なし、の検証」説を主張する人は、1876年にヴェンカーが方言調査を開始したこと、レスキーンが「音法則に例外なし」の有名な論文を發表したことを結びつけるのではないかと私には思われます。しかし、比較言語学時代の後半の理論を集大成したH.パウルの『言語史原理』*Prinzipien der Sprachgeschichte*を見ると、音「法則」*Lautgesetze*という語の意味について、自然科学でいう「法則」とどう違い、どう同じかということは論議されていたことが分かります。そして、パウルはその問題についてこう言っています：「現在の言語資料よりみて、どの範囲まで、音韻法則は例外なしとみられるか、という問題は直接に決定することはできない」[福本1965:63, ただし、この訳は第5版(1920)と第6版(1960)を底本としている]。これから推すに、「音法則に例外なし」の類の表現を文字通りに、つまり、「無条件に例外がない」と解釈する言語学者がいたとは考えられません。「無条件に例外がない」などと言えるはずがないことは、別に方言調査をやらなくても、ドイツを旅行したことがある言語学者なら、経験的に分かるはずだからです。

それはさておき、まず、身近な日本のドイツ語学界では一般的にどのように理解されているのでしょうか。次の引用は、「ドイツにおける言語研究の成果を記した」(S. (i)) 最近の辞典からです。

ヴェンカーは「音韻法則に例外なし」という青年文法学派の公理を確証する意図をもって(が、現実にはその逆であることが判明した)。(括弧は佐々木) [ドイツ言語学辞典(1994:877)]

日本の方言学界において、外国の事情にも関心をもっている方言学者の間でも、上のような見解が一般的であると、私の経験から言えます。この見解は、どこから来たものでしょうか。それによっては、これが特に日本の方言学界に限られたことではない、という可能性もでてきます。その意味でも、この主張の出処を明らかにすることが必要です。

2.1 「音法則に例外なし、の検証」説の主張者

『ドイツ言語地図』(DSA)は1956年の第20/21巻をもってひとまず完結しました。じつは、それとは別に、それまで各巻に付した各項目の地図の分布概説をまとめたものを中心として第22/23巻(1956)としています。解説 *Einführung* 編です。この時の編集者はミツカ W.Mitzka とマルティン B.Martin の二人です。その第22/23巻の「序」にあたる部分 (*Zur Einführung*, S.1) で、「音法則に例外なし」の検証説、をうち出しています。次のような内容です。

デュッセルドルフ生まれ(1852)のヴェンカーは、ゲルマン語の子音に関する自らの学位論文(テュービンゲン大学)に続いて、故郷ライン河兩岸【正確に言えば、ライン州北部の言語地図(1876)の調査で—佐々木】を調査し、比較言語学で、当時すでに定説になっていた「音法則に例外なし」説を確認しようとした。

In seiner rheinischen Heimat suchte Georg Wenker (geb. 1852 in Düsseldorf) im Anschluß an seine Tübinger Dissertation über germanischen Konsonantismus mit jener Aufnahme die Bestätigung der damals gerade formulierten Lehre von der Ausnahmslosigkeit der Lautgesetze.

上で触れているヴェンカーの学位論文は、『ゲルマン語における語幹末子音の変化について・表と調査』*Über die Verschiebung des Stammsilbenauslautes im Germanischen. Tabellen und Untersuchungen* というものです(1876年春出版)。私は断片的に引用されたものしか見ていませんが、B.マルティンあるいは、クヌープ他が言うところによれば、その論文(1876年7月20日受理)の中ではヴェンカーが実際に現地をあるいて観察して得た資料をもとに考察していることが窺えます。しかし、それ以後の彼の調査は、知られているように、いわゆる通信法に基づいています。

1876年以降のヴェンカーの方言調査は、最終的に公刊された『ドイツ言語地図』(DSA) で結実した、

ととりあえず言うておきます。「とりあえず」と言いました理由は、この『ドイツ言語地図』は、ヴェンカーが調査し、地図化した（最後の段階では、彼は志半ばで死去しましたから、後継者のヴレーデ Ferdinand Wrede (1863-1934) の助力を仰がねばなりませんでしたが)『ドイツ帝国言語地図』のごく一部（8%弱にすぎません）だからです。さて、『ドイツ言語地図』のための調査はすべて通信法という調査法でした。しかしこれに対して、上でのべた学位論文の時には、ヴェンカーが「実際に現地をあるいて観察して」資料を得たのです。このことを考慮にいと、臨地調査の経験があるヴェンカーが、臨地調査をしながら、「音法則」が厳密な意味で「例外なし」だ、などと感じていたとは、どうしても考えられないのです。

「音法則に例外なし」と言えば、この命題を謳った比較言語学者レスキーン August Leskien の『スラヴ・リトアニア語とゲルマン語における格変化』*Die Deklination im Slavisch-Litauisch und Germanischen* が出版されたのは、ヴェンカーが学位論文を提出した年、すなわち、1876年でした。ですから、ヴェンカーが学位論文のために行った臨地調査は少なくともその前年あるいはその前前年であったとみるのが妥当でしょう。さらに、レスキーンの著書刊行が1876年であったということは、すでにそれ以前にこういう種類の問題が当時の言語学者の間で話題になっていた可能性が十分あることを示唆しています。つまり、言語学でいう「法則」と自然科学でいう「法則」の違いなどは、当然話題になっていたはずです。このような学問的環境で、臨地調査の経験をもつヴェンカーは、「音法則」と言うときの「法則」が自然科学でいう「法則」ではないことを、身をもって感じていた可能性があります。この点からも、上のミツカとマルティンの解釈にたいして私は疑義を呈します。

マルティンは、次の引用を見ても分かるように、別の著書でも上と同様の主張をしています。マルティン (1889-1983) は、マールブルク大学『ドイツ言語地図』研究所の所長にこそなりはしませんでした。ヴェンカー以降の所長三代、ヴレーデ、ミツカ、シュミット Ludwig Erich Schmitt (1908-94) の右腕として活躍した同研究所所員でした

[Hildebrandt 1988:149/ Fn.5]。

ヴェンカーは比較言語学者として、レスキーンの「音法則に例外なし」などの命題の正しさを確信して、まず、これらを彼の故郷であるライン河沿岸の現実の方言で検証しようと考えた。

Als vergleichender Sprachwissenschaftler zunächst von der Richtigkeit der Lehrsätze Leskiens überzeugt kam er auf den Gedanken, diese in der Wirklichkeit seiner rheinischen Mundartlandschaft zu überprüfen. [Martin 1959:87]

上では、Lehrsätze「命題」が複数形になっていますから、「音法則に例外なし」だけを指しているわけではないことがわかります。しかし、「レスキーンの」と断っています。すると、レスキーンのあの有名な論文は、すでに指摘しましたように、1876年です。ヴェンカーは同じ1876年の4月5日にはすでに調査票を発送している [Martin 1934:6] ことが分かっています。さらにそれに先立つ3月には、デュッセルドルフの教育長あてに、調査の目的も記した協力依頼状をヴェンカーは送っています。もし、ヴェンカーがレスキーンのその論文を読んで影響を受けたというのであれば、1876年の1月から3月の間に、読んで調査を思い立った、ということになります。レスキーンの論文が1876年の何月に出版されたか分かりませんが、例え1月だったとしても、3月までの日数を考えれば、不自然さが残ります。

比較言語学者・風間喜代三はレスキーンの「音法則に例外なし」という表現についてレスキーン自身が言っている箇所を、次のように訳しています。

… 予期された音変化が、あるはっきりとした原因からおこらなかった場合が考えられるとすれば、音変化に例外なし、という命題に対しては、当然なにも異論の余地はないはず…

… あれこれの障害や他の法則の作用が存在しない場合には、予期された通りに働く。

[風間 1978:187-8]

つまり、音変化を妨げる要因がまったくない場合には、音変化は例外なく規則的に作用する。しかし、

音変化が規則的に作用するのを妨げる要因（例えば、類推作用がはたらく、など）がある場合は、規則的に作用しない。と言っていることとなります。「法則」と名乗るかぎり、まず、基本的原則を第1項として挙げ、第2項以下に、例外について補足する。しかし、その例外にも説明はつく。比較言語学における音法則の扱いはそういう方向に進んだはずです。H.パウルの *Prinzipien...* は初版1880年ですから、レスキーンの問題の書がでた時には、まだなかったこととなります。しかし、レスキーン1876の出版当時にはまだ、そこまで整理はできてなかったはずです。ですから、発表当初は、一般に「音法則に例外なし」が、「いかなる場合にも音法則に例外はなく、法則通り作用する、という意味にとられていたかもしれません。現に、比較言語学者・高津春繁が、レスキーンの「音法則に例外なし」は、

単にグリムやシュライヘル、クルティウスらの考えていた音法則を強調したものにはすぎなかった。[高津 1992:140]

と言っているくらいですから。いかに「言語学」を伝統的な学問の仲間入りさせるかが、比較言語学者の悲願でもありました。その過程で、言語学で言う「法則」と、「学問らしい学問である、自然科学で言う「法則」との違いが大きな問題になったのは、音法則は自然科学で言う「法則」と同じだと主張する言語学者がいたからです（例えば、シュライヘル）[高津 1992:140]。そういう学問的環境の中に、レスキーンの「音法則に例外なし」を置いて解釈することが必要だ、と私は思います。

このように考えますと、ヴェンカーが「音法則に例外なし」を方言地図を使って検証しようとした、と主張するとき、それはどういうことを意味するのだろうか、という疑問がついて離れません。

比較言語学時代後半の主流となったいわゆる「若者文法学派」の代表的言語学者 H.パウル Hermann Paul は『言語史原理』 *Prinzipien der Sprachgeschichte* (1966 [7. Aufl.]: 45) で、ヴェンカーの言語地図をみて、こう述べています。

全体からみたドイツ方言の漸進的段階は、特

に、いわゆる高地ドイツ語子音変化のようすによって観察できる。(略)この段階がきわめて多種多様であることを、さらに一層明瞭に示しているのが、ヴェンカーの創始した言語地図である。[福本 1965:38の一部を佐々木改訳]

Die allmähliche Abstufung der deutschen Dialekte im grossen lässt sich vortrefflich an dem Verhalten zu der sogenannten hochdeutschen Lautverschiebung beobachten. ... Ein noch viel deutlicheres Bild von der ausserordentlichen Mannigfaltigkeit der Abstufung gibt der von G. Wenker begründete Sprachatlas.

[Paul 1966 (7.Aufl):45]

パウルはヴェンカーの言語地図を見て、この地図が「音法則に例外なし」を検証したとかそれに失敗したとか、そのようなことは何も言っていません。それは、パウル自身、ヴェンカーの言語地図の目的が「音法則に例外なし」の検証などにあるのではないことを知っていたからです。このことは、後に説明します。

では、次に、マルティンとの連名で「音法則に例外なし」の検証説、を唱えたミツカはどうだったでしょうか。ミツカについては、現在のところ、この点で断定しかねる事情があります。ミツカには [Mitzka 1943:9] と [Mitzka 1952:7] とではこの点について言っていることが相異なるという現象がみられるからです。

ヴェンカーは、まずなによりも、狭い範囲で各地点から同一の調査票で資料を集めて、それをもって、方言における音法則、例えば、語末（あるいは音節末）に 'k' 音をもつ低地ドイツ語【北海に面する地帯 — H.S.】の単語はすべて、隣接する高地ドイツ語【ここでは、ドイツ語を低地ドイツ語と高地ドイツ語に二分割する立場をとっている。高地ドイツ語はドイツ標準語と言ってもよい — H.S.】では、必ず 'ch' 音になる、ということを示したいと思っていた。

Er hatte zunächst nichts anderes vor, als dort in einem beschränkten Gebiet aus jedem Orte den gleichen Text zu sammeln und daran zu zeigen, daß jedes mundartliche Lautgesetz, also z.B. jedes Wort mit auslautendem niederdeutschen 'k' im angrenzenden Hochdeutsch ein 'ch' zeigen müßte.

[Mitzka 1943:8-9]

これを、純粹に「音法則に例外なし」の検証」派に加えるは訳にはいきません。くだけて言えば、「規則的な音変化が、文献の中だけではなく、方言の中にも見られる」程度のものであって、もう一步踏み込んだ見解ではありません。その点すこし、曖昧な表現になっています。それから、9年後の著書では、次のようになっています。

その時のヴェンカーの目的は、低地フランケン方言【低地ドイツ語方言の一つ — H.S.】と、ライン州内で低地フランケン方言と隣接する他の低地ドイツ語方言とを総合した詳細な方言地図を作ることであった。

Seine Absicht war dabei, eine ausführliche Dialekttkarte der niederfränkischen, sowie der angrenzenden sonstigen niederdeutschen Mundarten der Rheinprovinz zu entwerfen.

[Mitzka 1952:7]

これは、9年前より、さらにおとなしい表現に弱まっています。ただ「詳細な方言地図」の作成とあるだけです。このように、ミツカは、1943年→1952→1956 (マルティンとの共著) と次から次へと、「ヴェンカーの最初の目的」についての見解が変わってきています。何を根拠にこのように見解を変えたのでしょうか。このことは後でまた触れます。

「音法則に例外なし」の検証説、派をもう一人挙げます。A.バッハ Adolf Bach (1950) 『ドイツ方言研究/方法・業績・課題』がそうです。この本は、彼の恩師 F.ヴレーデへ捧げているものです。バッハはヴレーデ自らによってヴレーデの後継者と目され

ていました、が最後の段階になって実現はしませんでした。ところで、バッハは「ヴェンカーの当初の目的」については、こう述べています。

ヴェンカーの目的は、次の二つであった。

- (1)「音法則に例外なし」の命題を現在の方言で検証すること、
- (2)ドイツ語の方言区画は、昔も今も本質的には同じである、ということを示す。

Was er wollte, war dies: das Axiom von der Ausnahmslosigkeit der Lautgesetze durch die lebenden Mundarten zu erweisen und überdies zu erhärten, daß die Mundart-Grenzen in alter und neuer Zeit sich im wesentlichen als die gleichen darstellten.

[Bach 1950:40]

ここでは、目的を二つ挙げています。上記(1)はりっぱに「音法則に例外なし」の検証説、派です。しかし上記(2)は今までにでてこなかった内容です。

この点、「音韻法則に例外なし」の検証説、派の他の方言学者とは違います。

以上、ミツカとマルティンの連名、マルティン、ミツカ、バッハの3人の四つのケースをみてみました。「音法則に例外なし」の検証説、派として括(く)くすることはできるとおもいますが、その主張には、「ゆれ」があることも確かです。

クヌープ他 [Knoop et al 1982:51] に拠れば、バッハ [1950:40]、ミツカ&マルティン [1956:1]、マルティン [1959:87] 以外に「音法則に例外なし」の検証説、派として次の学者も挙げています。

- (1)ブレットシュナイダー Anneliese Bretschneider (1934:96)
- (2)シュヴァルツ Ernst Schwarz (1950:43)
- (3)シュトロフ Friedrich Stroh (1952:418)
- (4)ヘンツェン Walter Henzen (1954:159)
- (5)アグリコーラ他 Erhard Agricola, Wolfgang Fleischer und Helmut Protze unter Mitwirkung von Wolfgang Ebert (Hrsg.) (1969:Band 1, 349)

3. ヴェンカーの目的説II：「^h明確な方言区画、の発見」説とその主張者

比較的早い時期に「^h明確な方言区画、の発見」説を唱えている人にソヴィエトの方言学者シルムンスキー Viktor M. Schirmunski がいます。著書『ドイツ方言学／ドイツ方言における音声と語形の比較』（ロシア語の原著1956のドイツ語訳1962）で述べています。

ヴェンカーは学位論文【1876年春出版、同7月20日学位授与 [Martin 1934:3] — H.S.】作成過程で、文献資料を基に方言区画をうち立てるには、量的にも質的にも不充分であることを痛感した。そこで、その論文の結論をさらに完全なものにしようと、デュッセルドルフ郡の国民学校の先生にヴェンカーが作った調査票を送り、それを各先生の方言で訳し、返送してもらうという方法で方言調査を実施しようと決心した。

Bei der Arbeit an einer Dissertation über die Geschichte der deutschen Sprache kam er in der Praxis zu der Übersetzung, daß die in der wissenschaftlichen Literatur vorhandenen Angaben über die Mundartgrenzen unvollständig und ungenau wären. Er beschloß, seine Aufstellungen dadurch zu vervollständigen, daß er einen von ihm zusammengestellten mundartlichen Fragebogen an die Volksschullehrer des Kreises Düsseldorf verschickte.

[Schirmunsky 1962:70]

この小論で紹介する、本題に関連した主要な文献のなかで、シルムンスキーのこの著書はいくつかの点で異彩を放っています。このドイツ語訳は、ベルリンのアカデミーから出版されています。ヴェンカーが調査地域を拡大する節目では、ドイツ（第二）帝国の国務大臣あるいはプロイセン国の文部大臣に助成の申請を出しています。その中でも、北ドイツの調査終了後、南ドイツにまで拡張する申請の時は難航しました。けっきょくは受理され、それまでヴェンカー個人の研究調査で集めた資料が、受理後は

国の事業に移管されたり、出版にも条件が付されたりした大きな転換期でした。その時、実際にヴェンカーと折衝したのは、諮問されていたベルリンのアカデミーでした。主として、この時期のやりとりを、後に Kampf「闘争」と表現している人もいます。

上で「異彩を放って」と言いましたのは、他の文献にはない表現があることを指します。例えば、「ヴェンカーは、いわゆる‘若者文法学派’とは関係がなかった。ゲルマニスト（ドイツ語学者）ではあったが、大学の先生ではなかった。学校の教師をした後（大学の）図書館員になった」Wenker stand nicht mit den Junggrammatikern in Verbindung. Er (...) war Germanist, aber kein akademischer Lehrer, sondern Lehrer an einer Schule und später Bibliothekar.[1962:70] マールブルク大学の図書館員になったことは、多くの文献でも触れられていますが、その他の部分は他の文献にはみられない記述です。これは、たとえば『岩波西洋人名辞典』におけるヴェンカーの扱いと符合するようにも思えます。その辞典では、F.ヴレーデは見出しの項目にあります。が、ヴェンカーは単独の見出しはありません。F.ヴレーデの中で触れられている程度です。つまり、ヴェンカーが尊敬されている、というよりはむしろ、軽く扱われている、という印象をもちます。

しかし、裏を返せば、それだけシルムンスキーはヴェンカーを客観的にみることが出来る立場にあったとも言えましょう。生前ヴェンカーの近くいた人たちとそうでない人たちとの立場の違いが、「^h音法則に例外なし、の検証」説と「^h明確な方言区画、の発見」説という相異なる見方につながってゆく可能性を示唆しておきたいのです。

「明確な方言区画の発見」説派の代表として、その他、次の方言学者を挙げます。

(1)クヌープ他 Ulrich Knoop u.a.の『マールブルク学派／方言地理学の誕生とその初期』[1982]

ヴェンカーの最初の言語地理学的調査の動機は、「^h音法則に例外なし」の検証、ではなかった。(略)ヴェンカーの方言調査の最初の目的は、ヴィーガント他が言ったように「方言区画を言語地理学的是にしっかりと特定すること」であった。

Das Motiv für Wenkers erste sprachgeographische Versuche war nicht die Bestätigung der Ausnahmslosigkeit der Lautgesetze. ... Wenkers Forschungsziel in der Frühphase war, "dialektale Grenzverläufe areallinguistisch eindeutig zu fixieren"

[Wiegand/Harras (1971:13)]

[Knoop u.a. 1982:51]

「マールブルク学派」とはマールブルク大学におけるヴェンカーを祖とする方言地図に関係した人々を指します。そして、「音法則に例外なし」の検証」説を主張する人々は、「マールブルク学派」が中心です。そういう意味では、クヌープを始めとする現代のマールブルク学派の人々が「明確な方言区画」の発見」説と唱えるのは新鮮に思われます。ヴェンカーからの距離が遠くなったことで、客観的に見る目が見えたのです。

(2)ニーバウム Hermann Niebaum の『方言学』
Dialektologie [1983]

このヴェンカーの言語地図作成を「若手文法家たちの「音法則に例外なし」という主張の証明に結びつけようとする説をたびたび見かけることがある。(略)ヴェンカー自身にとって一番の関心事は、(略)十分な資料を基に「方言区画」を地図の上ではっきりと特定することであった。

Die Gründung des Sprachatlases hat man in den einschlägigen Handbüchern immer wieder damit in Verbindung gebracht, daß Wenker hiermit die junggrammatische These von der Ausnahmslosigkeit der Lautgesetze habe beweisen wollen. ...

Wenker selbst ging es, ... um "klare Dialektgrenzen", die er auf der Basis zureichenden Datenmaterials geographisch eindeutig festlegen wollte. [Niebaum 1983:30]

以上ざっと、ヴェンカーは方言地図に何を期待して臨地調査(フィールドワーク)を始めたのかという問にたいする回答として、「音法則に例外なし」の検証」説と「明確な方言区画」の発見」説の代表

的なものを見ました。数からいえば、「音法則に例外なし」の検証」説派が多くて優勢だという印象は否めない。しかし、もちろん数で決まる性質のものではありません。では、どちらが真実であったかについて述べます。

4. G.ヴェンカー自身の言葉によれば...

こういう問題が出されたとき、なによりも当の本人がこのことについて、どう言っていたか、どう思っていたか、を示すものにあたるのが最良の策です。幸い、ヴェンカーにはこの問題について触れている文献が二つありますから、次にその分析に移ります。

まず下に示すものは、G.ヴェンカーが、1876年3月付けの手紙です。結果的に『ドイツ言語地図』(DSA)を目指した最初の調査を始めるにあたって、デュッセルドルフ内の教育長宛に、特にインフォーマントの選択について協力依頼をした手紙です。その冒頭で次のように言っています。

わたくしの方言地図作成の目的は、ライン河岸ズィンツィヒを東西に走っている方言境界線から北側、つまり、ライン州の北半分の正確な方言地図を、下記のような名前で刊行することにあります。『低地ドイツ語の一つ低地フランケン方言とその方言に隣接するライン州の他の低地ドイツ語の詳細な方言地図/該当地域の学校の先生方の協力による編集』

Es ist meine Absicht, eine genaue Dialectkarte der nördlichen Hälfte der Rheinprovinz (bis zu der den Rhein bei Sinzig schneidenden Dialectgrenze) unter etwa dem Titel herauszugeben: "Ausführliche Dialectkarte der niederfränkischen sowie der angrenzenden niederdeutschen Mundarten der Rheinprovinz, zusammengestellt unter Mitwirkung der Herren Lehrer des Gebietes."

[Martin 1934:4]

これは、ヴェンカーの調査目的をズバリ述べている部分です。

もう一つは、G.ヴェンカーが1885年10月1日(土)にドイツ言語学会第38回大会(於・ギーセン)でおこなった講演を文字化したものです。1886年付になっているのはそのためです。この時期は、ヴェンカーが北ドイツ(中部ドイツも含める)の方言調査が終わり、その地図の第1分冊を1881年10月に出した状態のまま、南ドイツに調査地域を拡大すべく、そのための助成申請をドイツ帝国に出し、それが難航しているところです。

この講演では、まずヴェンカー自身に取り組んできた言語地図作成およびそのための資料収集作業について、1876年春から順を追って1884年秋までの経過状況を説明します。この部分を彼は「言語地図作成の外的運命」äussere Schicksale des Sprachatlas-Unternehmens [187] と表現しています。表に現れた「調査の進行過程」を「運命」Schicksale と表現しています。このことばに思いを込めているように読めます。

この説明が終わると、今度は、調査が進行するにつれて明らかになってくる厳然たる言語事実を目の前にして、ヴェンカーが予期していたことが裏切られ、自分の考えを変更せざるをえなくなった過程を述べます。この部分を彼は「言語地図作成の内的歴史」innere Geschichte unseres Unternehmens [189] と名づけています。この「内的歴史」の出だしは次のようになっています。

今 [1885—H.S.] から9年前 [つまり、1876年]、私の故郷 [デュッセルドルフを抱えるライン州] の方言を調査した。その時の一番の目的は、当時の方言に見られる重要でよく知られている特徴の分布とその境界線を今までよりももっとはっきり特定することだった。

Als ich vor neun Jahren die Mundarten meiner Heimatprovinz in Untersuchung zog, that ich es hauptsächlich, um eine Anzahl wichtiger und in allgemeinem Ansehen stehender Eigentümlichkeiten der dortigen Dialekte schärfer als bisher abzugrenzen und festzustellen. [189]

そして、さらに、畳みかけるようにこう続けます。

当時の私はまだ、こう信じて疑わなかった。つまり、そういう方言特徴の境界線が、完全にあるいはほとんど完全に一つの束になって走っていて、したがって、はっきりした方言区画が地図上に見られるものだ、と。だから、どの地点もかならずどこかの方言区画に振り分けることができる、と。

Ich lebte noch in der schönen und beruhigenden Überzeugung, diese Charakteristika müßten ganz oder nahezu ganz einträchtiglich zusammengehn und so eine klare Dialektgrenze ergeben, der zufolge jeder Ort entweder dem einen oder dem andern Dialektgebiete zugewiesen werden könnte. [ibid.]

このようにはっきりと、ヴェンカーは、言語地図作成のための調査を始めたときに抱いていた期待を述べています。ここまで来て、すでに上で紹介した「¹音法則に例外なし、の検証」説と「²明確な方言区画、の発見」説のどちらが真実なのかがはっきりしたのではないのでしょうか。とうぜん後者「²明確な方言区画、の発見」説が正しかったことになります。この講演の聴衆の中には H.パウルもいました。

しかし、その後このヴェンカーの期待がどうだったか。期待どおりだったか、期待はずれだったか？ その後のことを見届けることは「¹明確な方言区画、の発見」説が正しかったことを不動のものにすることにもなりますから、最後まで(と言っても1885年時点までのことですが) 追跡する必要があります。

ヴェンカーの当初の期待も、実は、現実にできあがった分布地図を見て、裏切られました。続けて、そのことを述べています。そのあたりを彼は次のようにふり返っています。

信じて疑わなかったあの期待は、すぐにまったくの誤りであることが分かった。私が考えていた方言特徴を地図化してみると、その境界線は、一つ一つが勝手気ままに走り、たがいに交錯していることもしばしばだった。

Jene Voraussetzung erwies sich bald genug als eine durchaus irrig, die Grenzen der vermeintlichen Charakteristika liefen

eigensinnig ihre eigenen Wege und kreuzten sich oft genug. [189-90]

そして、調査が進むにつれて、この傾向がますますはっきりしてきました。では、なぜ自分が期待したとおりにならないのか？自分の期待を裏切る原因はどこにあるのか？一体自分は、何のために方言調査をやってきたのか？落胆と焦燥がうず巻きます。

しかし、それにもかかわらず、このまったく混乱した頭の中から、こうなった原因を正しく理解することが出来、浮かんでくるあれやこれやの謎と疑問を満足のいくように解きあかしたいという希望の火が消されないようにするただ一つの方法が最後に残った。

Und dennoch, bei alledem blieb eine Art Methode in dem tollen Durcheinander, die die Hoffnung auf ein klares Verständnis und auf eine befriedigende Lösung der aufgetauchten zahlreichen Rätsel und Fragen nicht untergehen ließ. [190]

それは、今までヴェンカーが抱いていた、古い素朴な方言区画観を根底から改めることでした durchgreifende Umwandlung der alten naiven Vorstellung von Dialektgrenzen [190].そして、調査地域を北ドイツ全域に拡大すれば手掛かりがつかめるかもしれない、と考えました。ですから、調査地域の拡大は、彼のこれからの方言地理学理論を生み出すために必要だった、と言えます。なぜなら、言語現象を幅広く科学的に観察するためには、一見不規則にしか生じないような、あるいは散在するだけのような音声的・形態的变化をも追跡し、その意味を正しく理解するよう努めなければならない、と思ったからです。

こうしながら、ヴェンカーは言語地図を学問の中でどう位置づけすべきかを探り、言語地図の意義を見いだす思索をめぐらします。そして、次のような体系を構築します。

方言研究の真の課題とは、むしろ、われわれゲルマン民族の歴史、いろいろな古代民族との混交、その相互影響、の研究、つまり、ほ

んらい歴史的な考察に役立つもののひとつにすぎない。

...die eigentliche Aufgabe der Dialektforschung, dies ist vielmehr nur ein Dienst, den sie der Untersuchung unserer Stammesgeschichte, der Vermischung und gegenseitigen Beeinflussung der zahlreichen alten Stämme, also einer im wesentlichen historischen Betrachtung leistet. [ibid.]

ゲルマン民族の歴史研究に仕えるしもべとしての方言研究を考えました。すこし意外に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、当時の潮の流れを考えますとよく理解できます。ドイツ文学者・高橋健二 (1968) によればこうあります。

ドイツでは、民族の文学的な宝としての民謡や童話を収集、刊行しようという機運が18世紀末から高まり、19世紀に入っていよいよ盛んになって、ドイツ民族精神の復興に、ドイツ文学の新風に、大きな刺激を与えた [高橋1968:82]

G.ヴェンカーが普仏戦争 (1870/7/19-71/5/10)に義勇兵として参戦したことがあることを思い合わせることもできます。ヴェンカーは1852年生まれの当時18才。

さて、それでは具体的に、方言研究の目指すこととは――

個々の音声・形態のあらゆる程度の差異を、その誕生・発展について、また、その相互関係について明示し、その本質を正しく理解し、それに説明を加えることである。ただし、その現象が単一の民族内に限るか、あるいは、二つの民族の境界地帯でのことか、あるいは、いくつかの民族地域にまたがってのことかは問わない。

alle Abstufungen der einzelnen Laute oder Formen, gleichviel ob sie nur innerhalb eines Stammesgebietes oder an der Grenze zweier Stämme oder über mehrere Stammgebiete hin verbreitet sind, in ihrem sprach-

lichen Werden und Wachsen, in ihrer gegenseitigen Bedingtheit darzulegen und wenn möglich zu verstehen und zu erklären. [190]

では、その方言研究——言語研究といっても同じこと——と言語地図との関係はいかに？

言語の研究に確固たる基礎を与え、微細な点に至るまでの正確な基礎を与えることこそ、言語地図のもっとも重要な任務である、とわたしは思う。

...gerade dieser rein sprachlichen Forschung eine sichere und wenn ich so sagen darf mikroskopisch genaue Grundlage zu geben, scheint mir die Hauptaufgabe des Sprachatlas zu sein. [ibid.]

「微細な点に至るまでの正確」さ、とは、言語地図において一つの地点にしかみられない現象でも無視しない、という態度のことです。このように、「ゲルマン民族の歴史」<「方言研究」<「言語地図」の構図に従えば、

方言現象の地理的考察は、古代ゲルマン民族の様子を探るための歴史的・地理的研究を大きく促進させる目的もある。

(Somit) hat die geographische Behandlung dialektischer Erscheinungen einmal den Zweck, die historisch-geographische Erforschung unserer alten Stammesverhältnisse wesentlich zu fördern [191]

また、

方言現象の地理的考察は、地名研究、建築・農業・風俗習慣に見られる文化的・歴史的事情の研究と協力すれば、「ゲルマン民族の歴史」研究という目的達成に寄与できる、と確信する。

ich habe die feste Überzeugung, daß sie diesen Zweck in Verbindung mit der Ortsnamenforschung, mit dem Studium der im

Hausbau, in der Ackerwirtschaft, in Sitten und Gegräuchen ausgeprägten kulturhistorischen Verhältnisse sehr wohl erreichen wird. [ibid.]

それでは、「言語地図」が「ゲルマン民族の歴史」研究に寄与できる裏付けはどこにあるか。それには、「言語地図」という共時態としての分布と「ゲルマン民族の歴史」という通時態がどう関係づけられるか、という問題を解決しなければならないことにヴェンカーは気づきます。そして、こう自問します。

どのようにすれば、純粋に地理的＝空間的資料を、純粋に歴史的＝時間的観察法に役立てることができるか？

wie kann ein rein geographisch, also räumlich angeordneter Stoff einer rein geschichtlichen, also zeitlichen Betrachtungsweise dienlich werden? [ibid.]

これに対する自答は、「いろいろなやり方がある」in sehr verschiedener Weise と言って、いくつか例をあげますが、理論的核心部分は次のところです。

どのようにして、同時代の言語現象の地理的分布を同じ場所で起こった言語現象の歴史的順序に置き変えるか、また、どのようにして、それ相応の慎重さをもって手続きを踏めば、方言の歴史過程でもうとっくに消えてなくなった前段階の様子を生き生きと我々の眼前に蘇らすことができるか。それは、言語史の中でこんにちまで生きながらえてきた他の方言と比較することによって可能である。この方法が正しいことは、言語変化があらゆる地点で、同じ強さ、同じ速さで進行するものではない、という事実によって証明される。またこの方法は、拡大すれば、言語地図に潜在しているいろいろな事実にも適用できるだろう。wie wir ein geographisches Nebeneinander gleichzeitiger Erscheinungen in ein historisches Nacheinander gleichörtlicher Entwicklungen umsetzen, und wie wir, bei nötiger Umsicht und Vorsicht, die in einem

Dialekte längst entschwundenen Vorstufen einer sprachlichen Entwicklungsreihe uns lebendig vor Augen führen können, indem wir andere in der Entwicklung weiter zurückgebliebene Dialekte zur Vergleichung ziehen. Dieses Verfahren nun, zu dem uns die Tatsache berechtigt, daß sprachliche Umwandlungen sich nicht auf allen Teilen ihres Gebietes gleich energisch, gleich schnell durchsetzen, dieses Verfahren wird auf die im Sprachatlas niedergelegten Tatsachen ausgedehnte Anwendung finden. [ibid.]

われわれは、ここにヴェンカーが「方言地図」の位置づけだけではなく、具体的な作業原則の一つとして、F.v.ソスニール以後の言葉でいえば、「共時態」と「通時態」との地理的關係について、考察していたことが分かります。

このように、「ゲルマン民族の歴史」を目標にかかげ、その補助学としての「方言研究」、さらには、「方言研究」の基盤としての「言語地図」を配置する、という構図を描いたのでした。それは、方言調査を進めながら、その実態に直面した結果、たどり着いた構想でした。

以上で、「言語地図作成の内的歴史」における主要な主張が終わります。その主張を軸に、一転して、それまでの調査地域をさらに拡大する必要性を説きます。

(だから) 言語地図が方言研究のための体系的な基礎を与えるのがもっとも重要な目的であるならば、わたくしどもの言語調査の対象地域を南ドイツにまで拡張してもらいたい、と言っても、それは当然の要求である。しかも、この要求は、方言が現在、ドイツ標準語の影響を受け、絶え間ない衰退と崩壊の憂き目にあっている時だけに、緊急を要するものである。

Soll (daher...H.S.) der Sprachatlas seinen Hauptzweck, eine einheitliche Grundlage zu jener Forschung zu geben, erfüllen, so ist

es eine unabwiesbare Forderung, daß er auch über Süddeutschland ausgedehnt werde. Und diese Forderung tritt um so dringender an uns heran, wenn wir bedenken, daß unsere Mundarten unaufhaltsam dem Verfall, der Zersetzung durch das Schriftdeutsche, entgegen gehen. [192]

そして、調査地域拡大と、それまでに調査済の地域(ドイツ北部)の言語地図刊行の費用助成をアカデミーに申請中だが、今のところ財政難を理由に却下されていることを述べ、最後に次の一文で講演を終わります。

ドイツ言語地図はわれわれの民族とわれわれの祖国の一体性を印す記念碑でもある。

auch er [= den begonnen Sprachatlas ...H.S.] ein Denkmal der Einheit unseres Volkes und unseres Vaterlandes. [193]

ヴェンカー自身の講演を詳しく分析してきましたが、言語地理学の歴史を記す観点から重要なことを二つ付記しておきます。

(1) 方言の過渡地帯に注意を向けよ — 「相異なる現象が相離れて分布領域をもっている所ではどこでも、その中間(ごく狭い範囲である場合が多いが)に過渡的現象が見られる」 Überall sehen wir Zwischenstufen, Übergänge — oft in ganz geringfügiger Ausdehnung — zwischen weiter auseinanderliegenden Erscheinungen eingeschoben. [191]

(2) 言語地図というものはそれ自体が最終的なものではない — 「(つまり) わたしは目指している言語地図がそれ自体で完成したものであるなどはけっして思っていない」 Ich betrachte nämlich den Sprachatlas keineswegs als eine abschließende Arbeit. 「(わたしはむしろこう望んでいる) つまり、言語地図は実り多い体系的な地域研究へと進むべきで、その地域研究によって言語地図は必要に応じてだんだん完成させていくものだ」 Ich hoffe vielmehr, daß er anregen wird zu fruchtbaren systematischen Lokalforschungen, die eine notwendige Ergänzung zu ihm [= Sprachatlas — H.S.] bilden werden. [192]

5. 結 論

G.ヴェンカーが学位論文を書き、受理された直後の1876年4月5日に開始した方言調査の意図は、「明確な方言区画、の発見」にありました。この方言調査の意図については、A.レスキーンを代表とする当時の「若手文法学派」が主張する「音法則に例外なし、の命題を検証するためであるという、きわめて有力な説が流布しています。しかし、当の本人であるG.ヴェンカー自身がそのことについてふれている[Wenker 1876] および[Wenker 1886]の文献によれば、「明確な方言区画、の発見」説が正しいことは明白な事実です。その文献には、「音法則に例外なし、の検証」あるいはそれに類した表現はいっさい出てきません。

それでは、このような明白なことが、なぜ誤って伝えられてきたのでしょうか。それについては、H.ニーバウムが[Niebaum 1983:30]で触れているとおりでしょう。つまり、ヴェンカーに近かった人たちの、ヴェンカーの仕事をこよなく誉め讃えたい一心がこのような形になって現れた。言語学史のなかに輝かしい足跡を記録しておきたい、と。ヴェンカーが調査開始した1876年は、A.レスキーンの代表作が発表された年でもあります。とうぜん結びつけたくなくなります。説得力は充分です。もちろん悪意からではなかったにしても、この説を主張する人たちにも一抹の不安があったに違いありません。それを思わせるのが、ミツカです。[Mitzka 1943]では、音法則のことに触れてはいますが、「音法則に例外なし、の検証」とまでは言っていません。[Mitzka 1952]では、「詳細な方言地図」と言って「明確な方言区画、の発見」に近い発言です。そして、[Mitzka & Martin 1956]では、「音法則に例外なし、の検証」を謳っています。このように、ミツカの述べていることには揺れがあります。彼は、『ドイツ言語地図』研究所(マールブルク大学)の所長を1933年から勤め、1956年にL.E.シュミット Schmittと交代しています。責任から言えば、マルティンより大きな責任がありますから、発言は慎重です。これに対して、マルティンは一貫して「音法則に例外なし、の検証」説です。[Mitzka & Martin 1956]の序でのこの問題についての発言はマルティンの意見が採ら

れたものと考えられます。

念のためにもうしますと、ヴェンカーがギーセンで開催された学会で講演した年から数えてちょうど10年後、同じ学会のケルン大会(第43回)で講演しています。それを読んでも、ここでの結論を修正する余地はありません。

参考文献

- Bach, Adolf (1950) *Deutsche Mundartforschung/ Ihre Wege, Ergebnisse und Aufgaben* [2. Aufl.], Heidelberg: Carl Winer, Universitätsverlag
- 風間喜代三(かざま・きよぞう)(1978)『言語学の誕生—比較言語学小史—』(岩波新書 69)、岩波書店
- 高津春繁(こうづ・はるしげ)(1992)『比較言語学入門』(岩波文庫 33-676-1)、岩波書店
- Hildebrandt, Reiner (1988) Hundert Jahre Deutscher Sprachatlas in Marburg/Lahn 1888-1988, in: *Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik* 55.2: 146-154. (Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden)
- 岩波書店編集部(1956)『岩波西洋人名辞典』岩波書店
- 川島淳夫(かわしま・あつお)(編集主幹)(1994)『ドイツ言語学辞典』紀伊國屋書店
- Knoop, Ulrich, W.Putschke, H.R.Wiegand (1982) *Die Marburger Schule: Entstehung und frühe Entwicklung der Dialektgeographie.* In: *Dialektologie. Ein Handbuch zur deutschen und allgemeinen Dialektforschung.* Hg. von Besch, Werner u.a. Erster Halbband, Berlin/New York.S.38-92.
- Martin, Bernhard (1934) Georg Wenkers Kampf um seinen Sprachatlas (1875-1889) in: Von Wenker zu Wrede (Festschrift F.Wrede). *DDG* 21,S.1-37.
- * *DDG = Deutsche Dialektgeographie.* Marburg 1908-
- (1939) Lebensbild Wenkers, in: *Lebensbilder aus Kurhessen u. Waldeck 1.*
- (1959) *Die deutschen Mundarten*

- (zweite,neubearbeitete Auflage), Marburg: N. G.Elwert Verlag.
- Mitzka, Walther (1943) *Deutsche Mundarten*, Heidelberg:Carl Winter, Universitäts-verlag.
- (1952) *Handbuch zum Deutschen Sprachatlas*, Marburg:Elwertsche Universitätsbuchhandlung.
- Niebaum, Hermann (1983) *Dialektologie* (Germanistische Arbeitshefte 26),Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Paul, Hermann (1966/7.Aufl.) *Prinzipien der Sprachgeschichte*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag. [初版は 1880][福本喜之助(ふくもと・きのすけ)・訳 (1965)・訳 (1965)『ヘルマン・パウル 言語史原理』講談社 [5版1920と6版1960を底本とする]]
- Schirmunski, Viktor M. (1962) *Deutsche Mundartkunde/Vergleichende Laut-und Formenlehre der deutschen Mundarten*, Berlin: Akademie-Verlag. (Russian original edition, Moskau 1956)
- 高橋健二 (たかはし・けんじ) (1968)『グリム兄弟』(新潮選書)、新潮社
- Wenker, Georg (März 1876) Anschreiben an die Kreisschulinspektoren des Regierungsbezirks Düsseldorf. In: Bernhard Martin (1934) *Georg Wenkers Kampf um seinen Sprachatlas* (1875-1889), S.4-5.
- (1886) (Vortrag über das Sprachatlasunternehmen) in: *Verhandlungen der 38. Versammlung deutscher Philologen und Schulmänner in Gießen vom 30. September bis 3. Oktober 1885*. Leipzig. S.187-194.
- (1895) Über den Sprachatlas des Deutschen Reiches, in: *Verhandlungen der 43. Versammlung deutscher Philologen und Schulmänner* Leipzig. S.34-43.

資料1 DSAの表紙書きの変化

ヴェンカーは、通信調査法ではありましたが、長年にわたってドイツ方言資料を収集しました。それに基づいて地図化されたものの中で一番まとまった形で公刊されているものが *Deutscher Sprachatlas* 『ドイツ言語地図』です。ヴェンカーとヴレーデによって、下書きではありますが、地図化されている『ド

イツ帝国言語地図』1646枚（マールブルク大学付属『ドイツ言語地図』研究所とベルリン国立図書館にそれぞれ一部ずつ保管）に較べれば、ヴェンカー積年の労が報われたとは言えません。しかし、DSAが公刊されたものではもっとも多くの言語地図を纏めたものです。その内容を明示しておくことは、何らかの役にたつとおもいますので、以下紹介します。国立国語研究所図書館所蔵のものに依りました。白沢宏枝研究員を介して閲覧させていただきました。ありがとうございました。

『ドイツ言語地図』（DSA）

分冊番号（*1）	地図番号（*2）	分冊番号	地図番号
1 (1926)	1-8 {8}	10 (1938)	57-62 {6}
2 (1928)	9-14 {6}	11 (1939)	63-68 {6}
3 (1929)	15-20 {6}	12/13 (1951)	69-74/75-80 {12}
4 (1930)	21-26 {6}	14/15 (1952)	81-86/87-92 {12}
5 (1931)	27-32 {6}	16/17 (1953)	93-98/99-104 {12}
6 (1932)	33-38 {6}	18/19 (1954)	105-110/111-116 {12}
7 (1934)	39-44 {6}	20/21 (1956)	117-122/123-128 {12}
8 (1935)	45-50 {6}	22/23 (1956)	Einführung 35 S.
9 (1937)	51-56 {6}		

*注

(*1) 分冊番号に続く（ ）内の番号は出版年。

(*2) 地図番号に続く { } 内の番号はその号の地図の合計枚数。

表紙

全分冊をとおして、縦61cm×横68cmの変形版。

第1群：第1分冊(1926)－第4分冊(1930)

DEUTSCHER SPRACHATLAS【‘ ’は佐々木 H. S.が付した改行を示す符合。以下【 】内は H.S.の解説部分を示す】

auf Grund des von GEORG WENKER begründeten」

Sprachatlas des Deutschen Reichs」

und mit Einschluß von Luxemburg」

in vereinfachter Form bearbeitet bei der」

Zentralstelle für den Sprachatlas des Deutschen

Reichs und deutsche

Mundartenforschung」

unter Leitung von」

Ferdinand Wrede」

【訳】『ドイツ言語地図』：G.ヴェンカーが基礎を築いた『ドイツ帝国言語地図』に基づいたもので、(ドイツ全土および)ルクセンブルク国を含む。本地図は、F.ヴレーデの指導のもとに(マールブルク大学付属)『ドイツ帝国言語地図』およびドイツ方言研究のための中央研究所で『ドイツ帝国言語地図』を簡略化したもの【この直後の行に分冊号の数字がくる】

N.G.ELWERT'SCHE VERLAGSBUCHHANDLUNG (G.BRAUN) 【出版社】

MARBURG (LAHN) 【出版社の場所。このあとに

出版年が続く】

【第1分冊には、他の分冊とは異なり、表紙には上記の印刷がない。TEXTに依った】

第II群：第5分冊(1931)－第6分冊(1932)

DEUTSCHER SPRACHATLAS」

auf Grund des von GEORG WENKER begründeten」

Sprachatlas des Deutschen Reichs」

und mit Einschluß von Luxemburg, der deutschen Sprachteile der Tschechoslowakei, Österreich,」

der Sprachinsel Gottschee, Liechtenstein」

in vereinfachter Form bearbeitet bei der Zentralstelle für den Sprachatlas des Deutschen Reichs und deutsche Mundartenforschung」

herausgegeben von」

FERDINAND WREDE und BERNHARD MARTIN」

【訳】『ドイツ言語地図』：G.ヴェンカーが基礎を築いた「ドイツ帝国言語地図」に基づいたもので、(ドイツ全土および)ルクセンブルク国、チェコスロヴァキア国・オーストリア国のドイツ語地域、ドイツ言語島のゴツェー、リヒテンシュタイン国を含む。本地地図は、(マールブルク大学付属)「ドイツ帝国言語地図」およびドイツ方言研究のための中央研究所のF.ヴレーデとB.マルティンが「ドイツ帝国言語地図」を簡略化して編集したもの】【この直後の行に分冊号の数字がくる】

【出版社とその場所の表記は変わらず。場所のあとに出版年が続く】

第III群：第7分冊(1934)－第9分冊(1937)

DEUTSCHER SPRACHATLAS」

auf Grund des von GEORG WENKER begründeten」

Sprachatlas des Deutschen Reichs」

mit Einschluß von Luxemburg, der deutschen Sprachteile Österreichs, der

Tschechoslowakei,」

der Schweiz, der Sprachinsel Gottschee, Liechtenstein」

in vereinfachter Form bearbeitet beim Deutschen Sprachatlas」

begonnen von FERDINAND WREDE +, fortgesetzt von」

WALTHER MITZKA und BERNHARD MARTIN」

【訳】『ドイツ言語地図』：G.ヴェンカーが基礎を築いた「ドイツ帝国言語地図」に基づいたもので、(ドイツ全土および)ルクセンブルク国、オーストリア国・チェコスロヴァキア国・スイス国のドイツ語地域、ドイツ言語島のゴツェー、リヒテンシュタイン国を含む。『ドイツ言語地図』は、「ドイツ帝国言語地図」を簡略化して編集したもので、故F.ヴレーデによって開始され、W.ミツカとB.マルティンが継承している】

【この直後の行に分冊号の数字がくる】

【出版社とその場所の表記は変わらず。場所のあとに出版年が続く】

第IV群：第10分冊(1938)

DEUTSCHER SPRACHATLAS」

auf Grund des von GEORG WENKER begründeten」

Sprachatlas des Deutschen Reichs」

mit Einschluß von Luxemburg, der deutschen Sprachteile der Schweiz, der Tschechoslowakei,」

der Sprachinsel Gottschee, Liechtenstein」

in vereinfachter Form bearbeitet beim Deutschen Sprachatlas」

begonnen von FERDINAND WREDE, fortgesetzt von」

WALTHER MITZKA und BERNHARD MARTIN」

【訳】『ドイツ言語地図』：G.ヴェンカーが基礎を築いた「ドイツ帝国言語地図」に基づいたもので、(ドイツ全土および)ルクセンブルク国、スイス国・チェコスロヴァキア国のドイツ語地域、ドイツ言語島のゴツェー、リヒテンシュタイン国を含む。『ドイツ

言語地図』は、『ドイツ帝国言語地図』を簡略化して編集したもので、故 F. ヴレーデによって開始され、W. ミツカと B. マルティンが継承している】

【この直後の行に分冊号の数字がくる】

【出版社とその場所の表記は変わらず。場所のあとに出版年が続く】

第V群：第11分冊(1939)

DEUTSCHER SPRACHATLAS
auf Grund des von GEORG WENKER
begründeten
Sprachatlas des Deutschen Reichs
mit Luxemburg, den deutschen Sprachteilen von
Böhmen und Mähren, der Schweiz,
der Slowakei,
der Sprachinsel Gottschee, Liechtenstein
in vereinfachter Form
begonnen von FERDINAND WREDE,
fortgesetzt von
WALTHER MITZKA und BERNHARD MAR-
TIN

【訳】『ドイツ言語地図』：G. ヴェンカーが基礎を築いた『ドイツ帝国言語地図』に基づいたもので、(ドイツ全土および)ルクセンブルク国、ボヘミア地方・モラヴィア地方・スイス国・スロヴァキアのドイツ語地域、ドイツ言語島(飛び地)のゴツェー、リヒテンシュタイン国を含む。『ドイツ言語地図』は、『ドイツ帝国言語地図』を簡略化して編纂したもので、故 F. ヴレーデによって開始され、W. ミツカと B.

マルティンによって継承されている】

【この直後の行に分冊号の数字がくる】

【出版社とその場所の表記は変わらず。場所のあとに出版年が続く】

第VI群：第12/13分冊(1951)－第22/23分冊(1956)

DEUTSCHER
SPRACHATLAS
auf Grund des von GEORG WENKER
begründeten
Sprachatlas des Deutschen Reichs
in vereinfachter Form begonnen von
FERDINAND WREDE, fortgesetzt von
WALTHER MITZKA und BERNHARD
MARTIN

【訳】『ドイツ言語地図』：G. ヴェンカーが基礎を築いた『ドイツ帝国言語地図』に基づき、それを簡略化したもので、故 F. ヴレーデによって開始され、W. ミツカと B. マルティンによって継承された】

【この直後の行に分冊号の数字がくる】

【出版社名は第12/13分冊(1951)は N.G. ELWERT'SCHE VERLAGSBUCHHANDLUNG となり、第14/15分冊(1952)－第22/23分冊(1956)は、N.G. ELWERT VERLAG となる】

【出版社の場所の表記は変わらず。そのあとに出版年が続く】

資料2 DSA各分冊の内容

第1分冊(1926) 地図番号1-8

地図

番号 内容 (*が付いている番号地図は、パラフィン紙様の透明紙に同じ内容の地図が印刷されていることを示す。つまり同じ内容の地図が、例えば、3と3aのようにして二枚あることを示す。しかし、例えば、3aとのみある場合は、有るべき透明紙がないことを示す。紛失したようだ)

- 1 Grundkarte 基本地図(調査地域全域) [2百万分の1、以下②と記す]
- 2 基本地図(北西部) [1百万分の1、以下①と記す] / これは、ヴェンカー『ドイツ帝国言語地図』の〔北西部〕の基本地図と同じもの。
- 3a Lautverschiebung, Typen 音変化の類型②
- 4a ich 「私は(代名詞)」(1人称・単数・1格) 【調査文10】《音声に関する地図》(以下《音声》と略称する) ②
- 5a dir 「君に(代名詞)」(2人称「親称」・単数・3格) 【調査文12】《音声》②
- 6a beiß(en) 「噛む(動詞)」(beißenの3人称・複数・直説法現在のカッコ部を除いた部分) 【調査文14】《音声》②
- 7a -en 「動詞の語尾」(3人称・複数・直説法現在の語尾) 【調査文1, 14, 36, 38など】《形態に関する地図》(以下《形態》と略称する) ②
- 8a Pferde 「馬(名詞)」(中性・単数・3格) 【調査文4】、
Füße 「足(名詞)」(男性・複数・1格) 【調査文8】
《語彙に関する地図》(以下《語彙》と略称する) ②

第2分冊(1928) 地図番号9-14

地図

番号 内容

- 9 基本地図(北東部) / これは、ヴェンカー『ドイツ帝国言語地図』の〔北東部〕の基本地図と同じもの。①
- *10 mach(en) 「作る(動詞)」(不定詞形のカッコ部を除いた部分) 【調査文17】《音声》②
N.B. 以下この地図から、地図の下部に次のような文句が印刷されている: 「ドイツ帝国国務省およびプロイセン文部省の助成による」
- *11 -en 「不定詞形の語尾」(wachsen 「成長する」、machen 「~にする」、verkaufen 「売る」の総合図) 【調査文16, 17, 37】《音声》②
- *12 Brud(er) 「兄・弟(名詞)」(男性・単数・1格のカッコ部を除いた部分) 【調査文33】《音声》②
- *13 -er 「単数名詞の語尾」(Wetter; Wasser; Pfeffer; Tochter; Schwester, Mutter; Bruderにおける語尾の総合図、と思われる) 【調査文2, 4, 7, 9, 17, 33】《音声》②
- *14 laut 「大きな声で(副詞)」 【調査文22】《語彙》②

第3分冊(1929) 地図番号15-20

地図

番号 内容

- 15 基本地図(南西部) / これは、ヴェンカー『ドイツ帝国言語地図』の〔南西部〕の基本地図と同じもの。①
- *16 heiß 「(火が) 熱い(形容詞/述語的用法)」 【調査文6】《音声》②
- *17 Kind 「子ども(名詞)」(中性・単数・4格) 【調査文14】《音声》②
- *18 ißt 「食べる(動詞)」(essenの3人称・単数・直説法現在) 【調査文7】《音声》②
- *19 ist 「~である(動詞)」(seinの3人称・単数・直説法現在) 【調査文25にでてくる2番目のist、と思われる】《音声》②
- *20 ist 「~である(動詞)」(seinの3人称・単数・

直接法現在の総合図)【調査文 4, 5, 25】《音声》②

第4分冊(1930) 地図番号21-26

地図

番号 内容

- *21 euch「君たちを(人称代名詞)」(2人称`親称、・複数・4格)【調査文 31】《音声》・《形態》②
- *22 sei「~であれ(動詞)」(sein の命令法・単数)【調査文 17】《音声》・《形態》②
- *23 fest「ぐっすり(副詞)」【調査文 24】《音声》②
- *24 Hause「家(名詞)」(中性・単数・3格)【調査文 26】《音声》②
- *25 dich「お前を(人称代名詞)」(2人称`親称、・単数・4格)【調査文 14】《音声》・《形態》②
- *26 (1) hiner「~のうしろに(前置詞)」【調査文 26】《語彙》
(2) Dienstag「火曜日(名詞)」【南ドイツだけの質問項目】《語彙》②

第5分冊(1931) 地図番号27-32

地図

番号 内容

- 27 基本地図(1926年以降追加した、スイス・オーストリアを中心とする補充調査地域を含む総合調査地域)②
- *28 ge(brochen)「割る(動詞)」(brechen の過去分詞のカッコ部を除いた部分)【調査文 4】《音声》②
- *29 (ge)broch(en)「割る(動詞)」(brechen の過去分詞のカッコ部を除いた部分)【調査文 4】《音声》②
- *30 (gebroch)en「割る(動詞)」(brechen の過去分詞のカッコ部を除いた部分)【調査文 4】《音声》②
- *31 上記地図3, 4, 5, 6の補充調査地域言語地図 A②
- *32 上記地図7, 8, 10, 11の補充調査地域言語地図 B②

第6分冊(1932) 地図番号33-38

地図

番号 内容

- *33 weh「痛い(形容詞)」(述語的用法)【調査文 8】《音声》②
- *34 recht「正当な(形容詞)」(述語的用法)【調査文 35】《音声》②
- *35 Hund「犬(名詞)」(男性・単数・1格)【調査文 39】《音声》・《形態》②
- *36 sich「自分の手のために(再帰代名詞)」(3人称・男性・単数・3格)【調査文 33】《音声》②
- *37 上記地図12, 13, 14, 16の補充調査地域言語地図 C②
- *38 上記地図17, 18, 19, 20の補充調査地域言語地図 D②

第7分冊(1934) 地図番号39-44

地図

番号 内容

- 39 uns(erm)「私たちの(所有代名詞)」(1人称・複数・3格のカッコ部を除いた部分)【調査文 26】《音声》②
- 40 (uns)erm「私たちの(所有代名詞)」(1人称・複数・3格のカッコ部を除いた部分)【調査文 26】《音声》②
- 41 Wies(e)「草原(名詞)」(女性・単数・4格のカッコ部を除いた部分)【調査文 40】《音声》②
- 42 (Wies)e「草原(名詞)」(女性・単数・4格のカッコ部を除いた部分)【調査文 40】《音声》②
- 43 上記地図21, 22, 23, 24の補充調査地域言語地図 E②
- 44 補充調査地域言語地図 F②
(1)上記地図25, 26《音声》・《形態》・《語彙》、
(2)krumm「曲がっている(形容詞)」《語彙》(補充地域のための調査項目)、
(3)Apfelbäumchen「ちいさなリンゴの木(名詞)」(中性・複数・1格)【Satz 26】《音声》

第8分冊(1935) 地図番号45-50

地図

番号 内容

- 45 Gäns(e)「鶯(が)鳥(名詞)」(女性・複数・1格のカッコ部を除いた部分)【調査文 14】《音声》②
- 46 (Gäns)e「鶯(が)鳥(名詞)」(女性・複数・1格のカッコ部を除いた部分)【調査文 14】《音声》②
- 47 Dorf「村(名詞)」(中性・単数・4格)【調査文 37】《音声》②
- 48 er「彼は(人称代名詞)」(3人称・男性・単数・1格)【調査文 5】《音声》②
- 49 schön(e)「きれいな(形容詞)」(強変化・複数・4格のカッコ部を除いた部分)【調査文 33】《音声》②
- 50 (shön)e「きれいな(形容詞)」(強変化・複数・4格のカッコ部を除いた部分)【調査文 33】《音声》②

第9分冊(1937) 地図番号51-56

地図

番号 内容

- 51 er(zählt)「語る(動詞)」(erzählenの3人称・単数・直説法現在のカッコ部を除いた部分)【調査文 21】《音声》・《形態》N.B.赤・緑・紫3色刷りの分布地図。②
- 52 (er)zählt「語る(動詞)」(erzählenの3人称・単数・直説法現在のカッコ部を除いた部分)【調査文 21】《音声》・《形態》②
- 53 trink(en)「飲む(動詞)」(不定詞 auszutrinken‘飲み干す’の後綴りのカッコ部を除いた部分)【調査文 16】《音声》②
- 54 (trink)en「飲む(動詞)」(不定詞 auszutrinken‘飲み干す’の後綴りのカッコ部を除いた部分)【調査文 16】《音声》②
- 55 sprechen「言う(動詞)」(不定詞形)【調査文 31】《語彙》②
- 56 F.Wredes Einteilungskarte d.d.Mdaa. F.ヴレーデによるドイツ方言区画図②

第10分冊(1938) 地図番号57-62

地図

番号 内容

- 57 vier「4(基数詞)」【調査文 5】《音声》②
- 58 Schäf(chen)「子羊(名詞)」(中性・複数・4格のカッコ部を除いた部分)【調査文 37】《音声》・《語彙》②
- 59 (Schäf)chen「子羊(名詞)」(中性・複数・4格のカッコ部を除いた部分)【調査文 37】《音声》・《形態》②
- 60 hint(en)「後ろに(副詞)」(カッコ部を除いた部分)【調査文 40】《音声》②
- 61 (hint)en「後ろに(副詞)」(カッコ部を除いた部分)【調査文 40】《音声》②
- 62 Pfund「ポンド‘重量’(名詞)」(中性・単数・4格のカッコ部を除いた部分)【調査文 30】《音声》②

第11分冊(1939) 地図番号63-68

この分冊より凡例が地図の中に示された。第10分冊までは別冊TEXTに示してある。

地図

番号 内容

- 63 Luft「空中(名詞)」(女性・単数・4格)【調査文 1】《音声》②
- 64 (bau)en「建てる(動詞)」(不定詞形のカッコ部を除いた部分)【調査文 33】《音声》②
- 65 alt(e)「年老いた(形容詞)」(弱変化・単数・男性・4格のカッコ部を除いた部分)【調査文 4】《音声》②
- 66 (alt)e「年老いた(形容詞)」(弱変化・単数・男性・4格のカッコ部を除いた部分)【調査文 4】《音声》②
- 67 und「そして(接続詞)」【調査文 16】《音声》②
- 68 上記地図3, 4, 5, 7, 11, 12, 14の補充調査地域言語地図G②

第12・13合分冊(1951) 地図番号69-74・75-80

地図

番号 内容

- 69 bau(en)「建てる(動詞)〔北西部〕」(不定詞形のカッコ部を除いた部分)【調査文 33】《音声》①
- 70 bau(en)「建てる(動詞)〔北東部〕」(不定詞形のカッコ部を除いた部分)【調査文 33】《音声》①
- 71 bau(en)「建てる(動詞)〔南西部〕」(不定詞形のカッコ部を除いた部分)【調査文 33】《音声》①
- 72 bau(en)「建てる(動詞)〔南東部〕」(不定詞形のカッコ部を除いた部分)【調査文 33】《音声》①
- 73 nichts「何も～ない(不定代名詞)」【調査文 39】《音声》②
- 74 Eis「氷(名詞)」(中性・単数・4格)【調査文 4】②
- 75 上記地図16+37, 18+38, 19+38, 22+43, 23+43, 24+43のスイス言語地図 H ②
- 76 上記地図25+44, 28, 29, 30, 33, 34, 35のスイス言語地図 J ②
- 77 上記地図36, 39, 40, 41, 42, 44のスイス言語地図 K ②
- 78 kam(en)「来た(動詞)〔北西部〕」(kommenの3人称・複数・直説法過去のカッコ部を除いた部分)【調査文 24】《音声》①
- 79 kam(en)「来た(動詞)〔南西部〕」(kommenの3人称・複数・直説法過去のカッコ部を除いた部分)【調査文 24】《音声》①
- 80 kam(en)「来た(動詞)〔南東部〕」(kommenの3人称・複数・直説法過去のカッコ部を除いた部分)【調査文 24】《音声》①

第14・15合分冊(1952) 地図番号81-86・87-92

地図

番号 内容

- 81 kam(en)「来た(動詞)〔北東部〕」(3人称・複数・直説法過去のカッコ部を除いた部分)【調査文 24】《音声》①

- 82 (kam)en「来た(動詞)」(3人称・複数・直説法過去のカッコ部を除いた部分)【調査文 24】《音声》②
- 83 Salz「塩(名詞)〔北西部〕」(中性・単数・4格)【調査文 7】《音声》①
- 84 Salz「塩(名詞)〔北東部〕」(中性・単数・4格)【調査文 7】《音声》①
- 85 Salz「塩(名詞)〔南西部〕」(中性・単数・4格)【調査文 7】《音声》①
- 86 Salz「塩(名詞)〔南東部〕」(中性・単数・4格)【調査文 7】《音声》①
- 87 hoch「高い(形容詞)〔北西部〕」(述語的用法)【調査文 29】《音声》①
- 88 hoch「高い(形容詞)〔北東部〕」(述語的用法)【調査文 29】《音声》①
- 89 hoch「高い(形容詞)〔南西部〕」(述語的用法)【調査文 29】《音声》①
- 90 hoch「高い(形容詞)〔南東部〕」(述語的用法)【調査文 29】《音声》①
- 91 Schwest(er)「姉・妹(名詞)」(女性・単数・3格のカッコ部を除いた部分)【調査文 17】《音声》②
- 92 das「それは(指示代名詞)」(中性・単数・1格)【調査文 35】《音声》②

第16・17合分冊(1953) 地図番号93-98・99-104

地図

番号 内容

- 93 基本地図〔南東部〕①/ヴェンカー『ドイツ帝国言語地図』は、〔北西部〕〔北東部〕〔南西部〕の3分割法である。したがって、『ドイツ帝国言語地図』には〔南東部〕にあたる地図はない。
- 94 müd(e)「疲れている(形容詞)〔北西部〕」(述語的用法)【調査文 23】《音声》①
- 95 müd(e)「疲れている(形容詞)〔北東部〕」(述語的用法)【調査文 23】《音声》①
- 96 müd(e)「疲れている(形容詞)〔南西部〕」(述語的用法)【調査文 23】《音声》①
- 97 müd(e)「疲れている(形容詞)〔南東部〕」(述語的用法)【調査文 23】《音声》①
- 98 (müd)e「疲れている(形容詞)」(述語的用法)

【調査文 23】《音声》②

- 99 bin「現在完了の助動詞」〔北西部〕(sein の 1 人称・単数・直説法現在)【調査文 9】《音声》・《形態》①
- 100 bin「現在完了の助動詞」〔北東部〕(sein の 1 人称・単数・直説法現在)【調査文 9】《音声》・《形態》①
- 101 bin「現在完了の助動詞」〔南西部〕(sein の 1 人称・単数・直説法現在)【調査文 9】《音声》・《形態》①
- 102 bin「現在完了の助動詞」〔南東部〕(sein の 1 人称・単数・直説法現在)【調査文 9】《音声》・《形態》①
- 103 zwei「二(基数詞)」(不変化詞)【調査文 33】《音声》②
- 104 geh!「行け! (動詞) 〔北西部〕(gehen の 2 人称・単数・命令法)【調査文 17】《音声》①

第18・19合分冊(1954) 地図番号105-110・111-116

地 図

番 号 内 容

- 105 geh!「行け! (動詞) 〔北東部〕(gehen の 2 人称・単数・命令法)【調査文 17】《音声》①
- 106 geh!「行け! (動詞) 〔南西部〕(gehen の 2 人称・単数・命令法)【調査文 17】《音声》①
- 107 geh!「行け! (動詞) 〔南東部〕(gehen の 2 人称・単数・命令法)【調査文 17】《音声》①
- 108 sind「～である(動詞) 〔北西部〕(sein の 3 人称・複数・直説法現在)【調査文 13】《音声》①
- 109 sind「～である(動詞) 〔南西部〕(sein の 3 人称・複数・直説法現在)【調査文 13】《音声》①
- 110 sind「～である(動詞) 〔北東部〕(sein の 3 人称・複数・直説法現在)【調査文 13】《音声》①
- 111 sind「～である(動詞) 〔南東部〕(sein の 3 人称・複数・直説法現在)【調査文 13】《音声》①
- 112 Wort「単語(名詞) 〔北西部〕(中性・単数・1 格)【調査文 34】《音声》①

- 113 Wort「単語(名詞) 〔南西部〕(中性・単数・1 格)【調査文 34】《音声》①
- 114 Wort「単語(名詞) 〔北東部〕(中性・単数・1 格)【調査文 34】《音声》①
- 115 Wort「単語(名詞) 〔南東部〕(中性・単数・1 格)【調査文 34】《音声》①
- 116 als「～より(接続詞)【調査文 15】《音声》②

第20・21合分冊(1956) 地図番号117-122・123-128

地 図

番 号 内 容

- 117 dresch(en)「脱穀すること(不定詞の名詞化) 〔北西部〕(中性・3 人称・単数・3 格のカッコ部を除いた部分)【調査文 20】《音声》①
- 118 dresch(en)「脱穀すること(不定詞の名詞化) 〔北東部〕(中性・3 人称・単数・3 格のカッコ部を除いた部分)【調査文 20】《音声》①
- 119 dresch(en)「脱穀すること(不定詞の名詞化) 〔南西部〕(中性・3 人称・単数・3 格のカッコ部を除いた部分)【調査文 20】《音声》①
- 120 dresch(en)「脱穀すること(不定詞の名詞化) 〔南東部〕(中性・3 人称・単数・3 格のカッコ部を除いた部分)【調査文 20】《音声》①
- 121 (dresch)en「脱穀すること(不定詞の名詞化) 〔北西部〕(中性・3 人称・単数・3 格のカッコ部を除いた部分)【調査文 20】《音声》②
- 122 flieg(en)「飛ぶ(動詞) 〔北西部〕(fliegen の 3 人称・複数・直説法現在のカッコ部を除いた部分)【調査文 1】《音声》①
- 123 flieg(en)「飛ぶ(動詞) 〔北東部〕(fliegen の 3 人称・複数・直説法現在のカッコ部を除いた部分)【調査文 1】《音声》①
- 124 flieg(en)「飛ぶ(動詞) 〔南西部〕(fliegen の 3 人称・複数・直説法現在のカッコ部を除いた部分)【調査文 1】《音声》①
- 125 flieg(en)「飛ぶ(動詞) 〔南東部〕(fliegen の 3 人称・複数・直説法現在のカッコ部を除いた部分)【調査文 1】《音声》①
- 126 (flieg)en「飛ぶ(動詞) (fliegen の 3 人称・複数・直説法現在のカッコ部を除いた部分)【調査文 1】《音声》②

127 was「何(なに) (疑問代名詞)」(was für ein
の複数・1格)【調査文 36】②

128 auf「~を(待つ) (前置詞‘4格支配’)【調査
文 27】《音声》②

惜 別 之 辞

生活科教授・舟木行雄（ふなき・ゆきお）先生がこのたびご退職、と聞く。英語英文科創設と同時に着任してから、舟木先生とは同じ委員会に属したご縁で、親しくご指導を賜る榮に浴しました。これほど、胸襟を開いて語り合った方は、私の人生においても希有なことです。話題の広さにおいても、その深さにおいても、その頻度においても、です。このようなお付き合いになったきっかけは、まだ浅い年に、私が心底から怒り狂って、先生にぶつかったことでした。先生は、あくまでも静かに私の話に耳を傾けられました。話が終わるのを確かめて、先生は心をこめて懇々と自説を述べられました。あの時の真剣勝負を忘れることができません。相手を真正面から受け止め、相手に対する敬意を失わず、冷静に理を説く。私は負けた、と思いました。爾来、陰に陽に暖かいご指導を賜りました。

この小論も、まだ不十分なものではありませんが、これまでのお導きに対する満腔の敬意と感謝の気持ちをこめて、先生にお捧げする微衷をおくみください。